

Promise

～誘惑のゆくえ

綾瀬麻結

C o n t e n t s

Promise ～誘惑のゆくえ 5

White Letter 285

薔薇の契り 297

Promise

～誘惑のゆくえ

プロローグ

三十代は目前に迫っているのに、未だ独身。初めての恋人から受けた暴力的なセックス、人格を傷つけるような酷い仕打ちがトラウマとなり、恋をすることに臆病になってしまった。そんな経験をしてきても、やっぱり心のどこかで、人並みの幸せが欲しいとも思ってる。

幸せⅡ結婚。

本当は、そうではないと願いたい。結婚が幸せだなんて思いたくもない。

負け惜しみでそう思っているのではない。結婚という選択をしなくても、幸せな生活を送っている女性は、この広い世の中にはたくさんいる。人それぞれの価値観は違うのだから。

それなのに、同じ枠に入れない人に対して、女は妙に線引きをしたがる。

結婚もそう。

三十代で独り身だと、周囲から「まだ独身なんだ」と蔑さげすんだ口調で言われる。弱虫かもしれないが、それがとつても嫌で、苦痛でもあった。

そう思われたくない……。人並みの人生を歩んでいるのだと、普通に思われたい。

だから、結婚できる機会があるのなら、例え愛していない相手とでも、妥協してもいいかなと、気持ちが大きく揺らいでしまう。

愛はなくとも、穏やかな結婚生活で幸せを見つけたら、それでいいのではないかと。

(だって、あたし自身が結婚を望んでいるのだから)

恋に対して、少し冷めたところがあるのは十分わかっている。しかし、それでもやっぱり心の奥底では、素敵な恋がしたい……。願ってもいる。

そう願うのは、間違っているのだろうか？ でも、女だったら、誰でもそう思っているのでは？ いつの日か素敵な男性と巡り会い、お互いのことが忘れられないような、運命的な恋がしたいと。身も心も捧げられるような男性と出会いたいと、強く願っている。

(あたしも、まだ愛を切望しているのね)

そんな気持ちを抱いたまま、愛してもいない人からプロポーズされたら、貴方ならどうする？

イエス？ それともノー？

第一章 打算的な恋、運命の出会い

——四月 大阪

「俺と結婚して欲しい……」

大阪駅から、少し北東へ行った郊外にあるフランス料理店でのこと。ブルゴーニュ地方の美味しい食事を終え、食後のコーヒートを味わっている時にその言葉は発せられた。

目の前にいる彼……三十二歳の高原秀明が、真剣な眼差しで亜弥にプロポーズをしたのだ。

高原は、亜弥の目の前に、蓋を開けたベルベットの小箱をゆつくりと置いた。そこには、○・三カラットぐらいの一粒のダイヤモンドの指輪が鎮座していた。

給料の三ヶ月分といわれる婚約指輪。大企業に勤めている高原なら、○・五カラット以上の指輪を買えないはずはない。

だが、内蓋に印刷された、ウエディング雑誌でもよく紹介されているブランドのロゴと、照明で光り輝くエンゲージリングが、亜弥の注意を削いだのだった。

桜が既に散り始めた四月の初旬、進級した人、社会人になった人たちが胸躍らせるこの月に、や

つと亜弥にも春が訪れた。

しかし、亜弥はテーブルの下で思い切り両手を握り締めていた。

いいの？　ここで妥協して、彼のプロポーズにイエスと応えてもいいの？

(でも……もしこれを逃したら、あたしは一生結婚できないかもしれない)

亜弥は焦っていた。友達達は、皆幸せな結婚をしていて、自分だけがポツンと取り残されたような、そんな気分をずっと味わってきたからだ。

亜弥は、結婚したらすぐにでも子供が欲しいと思っていた。もちろん、自分だけを愛してくれる夫との子供だ。

そのためには本気で結婚相手を探さないと……と思った矢先、目の前にいる高原と出会い、数ヶ月の間デートを繰り返した。

高原と会う度に、彼の気配りや優しい性格を見て、好感を抱くようになった。

だが、彼を愛することだけは、何故かできなかったのだ。

如月亜弥は、つい先日誕生日を迎えて二十九歳になった。仕事は……順調とは言えない。未だにバイトの身分。

大学を卒業して銀行に就職した方がいいが、不況からリストラされ、その時に付き合っていた行員の先輩は、さっさと亜弥を捨てた。

別れの言葉は酷く冷たかった。仕事を失う不安を、全く感じ取ってくれなかった男。亜弥を大切

にし、慈しんでくれなかった男、そんな男とは別れて正解だった……と思えるほど、亜弥は強くはなかった。

心の中は荒れ狂い、張り裂けそうな痛みを感じながら、日々を過ごした。それは、少なくとも三ヶ月は続いた。

職と恋、両方を一度に失ったからだ。

そんな亜弥をずっと支えてくれたのが、七歳年下の弟、篤史あつしだった。やんちゃで……関西の男だとはつきりわかるぐらい、口が巧いうまい弟。その篤史だけが、亜弥の味方だった。

「姉ちゃん、大丈夫やって。何も心配せんでええから。俺が姉ちゃんを守ったるから」

二十四歳の姉に向かつて、十七歳の弟が堂々と胸を張って告げた言葉だった。

思わず涙が溢れそうになったのを、今でもはつきり覚えてる。亜弥は、篤史に頼られる存在であるべきなのに、弟は恥ずかしがる素振りを一切見せず、その腕の中に亜弥を優しく包み込んだのだ。あの小さかった弟が、姉を思う優しい男性に成長したのを目の当たりにして嬉しく思った。そして、そんな弟の存在をありがたく思った。

「亜弥？」

心配そうに問われ、亜弥は無理やり白昼夢を追い払った。

ずっと望んでいた、プロポーズを受けている最中だった。

……愛してもいない男から。

「俺はもう三十三歳だし、家庭を持ちたいと思ってる。その家庭には、亜弥にいて欲しいんだ」

亜弥は、強く手を握り締めた。

高原は、亜弥を愛してくれてる。付き合い始めてまだ三ヶ月、軀からだの関係だって未だないのに……

プロポーズを！

「返事は急がない……って言えば嘘になる。本当は今すぐにでも返事が欲しい」

どうしよう、どうしよう！ と、亜弥は心の中で慌てた。

今を逃せば、もう結婚できないかもしれない。そして、考える時間をもらえば、尻込みしてしまうのは目に見えている……絶対に。

それなら、今、うんと……イエスと言ってしまった方がいい。いつか、高原を愛するようになる日が来るかもしれないから。

亜弥の結婚した友人たちが言っていた言葉が、脳裏に浮かぶ。

『好きな人と結婚するより、好きになってくれた人と結婚する方が、絶対幸せになれるって』

『好きの気持ちが大きすぎると、相手が浮気するんじゃないかって心配ばかりしてしまうんだよねでも、相手が自分にぞっこんなら、そんな余計な心配しなくてもいいし。ほら、想うより想われるって言うじゃない？』

友達の言葉は、亜弥には全く理解できなかった。

「愛する人と共に生活するから、楽しいことも辛いことも乗り越えられるんじゃない？ 一緒に過ごせるんじゃない？」と言うと、バカにしたように鼻で笑われた。

「亜弥？」

無意識に過去の記憶の中を漂っていた亜弥だったが、高原の声で再び我に返った。

世間から取り残されたくないとずっと思っていたから、このプロポーズは喜んでいいはずなのに、何故か戸惑ってしまう。それは……やっぱり、愛しているという感情が持てないから。

でも、この機会を逃したら一生独身かもしれない。

そんなのイヤ！ 絶対イヤよ！

亜弥は、面を上げて高原を見つめた。

彼の身長は一八〇センチと高く、肩幅はがっちりしていて、胸板は厚い。

そう、体躯は文句のつけようがないほど引き締まっている。凛々しい眉の下にある目はキリッとした切れ長で、思わず吸い込まれそうになる時もある。鼻は少し大きい、唇は薄い。でも、その柔らかさは実証済みだ。

さらに、高原は、東京に本社を置く一流企業「水嶋グループ」の大阪支社土地開発部で働く、有能な営業マン。将来は安泰だ、玉の輿と言ってもいいと思う。

その彼が、どうして今まで独身で通していたんだらう？ 付き合う女性には、ことかかなかったはずなのに。

それに引き換え、亜弥は、駅前の病院で医療事務のバイトとして働く身分。高原の前に付き合った経験といえば、五年も前の話だ。

そういうこともあり、亜弥は何故高原に妻として望まれたのか、さっぱりわからなかった。話をすれば、そこそこの話題が広がるが、盛り上がるというほどでもない。

亜弥の外見が彼の好みだったのだろうか？

亜弥は、身長は一六六センチと標準より少し大きい方だが、躯の線はほっそりと引き締まり、女性として出るところは出ている。化粧をすればそこそこ見られる容姿だが、擦れ違う男性から、ハツと振り返られるような美人ではない。

ましてや、この年齢まで結婚していない、ほんの少しでも見目のいい女は、欲が深い、冷血、情が薄いなどと思われ、男性が敬遠してしまうのが普通だ。だが、高原はそれが亜弥に当てはまらないとわかったから、妻として選んだのだろうか？

「高原さん、本当にあたしでいいの？」

高原の答えに、全てを賭けようと思った。彼が本気でプロポーズをしているのなら、亜弥も一縷の望みに賭けてみようと思ったのだ。

「亜弥と初めて支社の医務室で会った時、俺の奥さんになる女性は、亜弥しかいないってわかったんだ。俺は亜弥を愛してる」

亜弥は、覚悟を決めるように瞼を閉じた。

（決心しよう。これだけ想ってくれているのなら、あたしは愛されて幸せになれる）

激しく情熱的な関係を結ぶことはできないかもしれないが、子供が生まれれば……穏やかな愛で家庭を包み込めるかもしれない。

亜弥は、ゆっくり顔を開けると高原を直視した。
「あたし、お受けします」

そう答えた瞬間、彼は喜びではなく、安堵の表情を浮かべた。その表情が、思わず亜弥の心にブレーキをかけた。

結婚したいと思った女性にプロポーズし、イエスという返事をもらえたというのに、何故歓喜に包まれない……ホツとしたような安堵の表情を浮かべるのだろうか？

その表情の裏に隠された真意を、もっと見極めようとしたが、高原の手が亜弥の手を取ったことで、その思いは一瞬で脇に追いやられた。

高原は、台座から指輪を取ると、亜弥の左手の薬指に、そっと填めた。

一瞬で、亜弥の心は凍りついた。

何か間違ったことをしたような感覚が、亜弥を襲ってくる。ダイヤモンドが冷たく光り、その光が鎖となつて、亜弥をがんにがらめに縛ったようにさえ思えた。

「ありがとう、亜弥。これからのこと、ゆっくり話していこうな」

「うん」

そう答えたものの、本当にこれで良かったのかわからなかった。

事実、この婚約を後悔するような、新しい出会いがその身に起こるなんて、この時は思いもしなかった。



——五月

「ねえ、この後はどうします？ わたし……水嶋さんみずしまとなら、一緒の部屋で吞んでもいいですよ」

甘い声で囁いたその女性は、人差し指で軽く腕に触れてくると、そのまま爪を立てておもむろに愛撫をしてきた。その甘い感触が男の欲望を刺激し、軀からだの芯に火を点ける。

だが、欲望の火を煽られても、今は全くその気になれなかった。

水嶋グループ創立者の孫にして、東京本社々長の息子の一人でもある水嶋康貴みづしまは、ホテルのバーで秘書の一人と共に吞んでいた。

だが、秘書が匂わせてきたような関係を求めて、この場所を選んだのではなかった。急ぎの仕事が入ったので、秘書室で帰り支度をしていた彼女に仕事を頼んだ。それを遅くまで快く手伝ってくれた彼女に、せめてものお礼として、食事をごちそうしただけだったのだ。

それを、こんな風に誤解されるとは。

「君を、送ろう」

康貴が素早く立ち上がると、秘書は驚いたように目を大きく開けた。

「でも！」

「君はどうか知らないが、俺にはまだ仕事が残ってるんだ」

きつい言い方かもしれないが、希望を持たせるようなことはしたくない。

彼女を促し、エレベーターでロビーまで下りると、さつさと歩いて玄関ホールを抜けた。

ドアマンに手振りでタクシートのドアを開けさせると、秘書に乗るよう目で告げた。

「彼女が言う住所まで行ってくれ」

タクシートの運転手にそう告げ、秘書の手に金を握らせる。

「今日は土曜日だというのに、遅くまで仕事を手伝ってくれてありがとう。これは、タクシー代に使ってくれ」

何か言いたそうに、上目遣いをしてくる秘書から、離れるように一步後ろに下がると、ドアがバタンと閉まり、タクシーが走り出す。

康貴は、秘書の誘惑から逃れることに成功した安堵感から、肩の力を一気に抜いた。

先程のタクシー運転手は、何の仕事を手伝わせたんだか……と思ってるに違いない。

顔見知りでもないのだから、別に構わない。

「タクシーに乗られますか？」

ホテルのドアマンが、声をかけてくる。

「いや、いいよ」

片手を上げて拒絶すると、康貴はホテルからすぐ近くの駅には向かわず、ここから十数分離れたところにある、普段から利用している駅の方へ歩き出した。

女が欲しければ、そういう女はたくさんいる。現に今だって、一人はキープをしている。だが、そういう軀だけの関係は、正直もううんざりしていた。

康貴は、女性とは楽しく過ごせたらそれで良かった。付き合うことで、女性に縛られるようになることだけは、絶対嫌だったからだ。

そう思っていたのに、その考えは一瞬でヒビが入った。

つい先日、久しぶりに東京の実家に戻った時、意外な事実を知ったのが原因だった。

康貴には、二歳年上の長兄、一貴と、一卵性双生児として共に生を受けた次兄、優貴の兄弟がいた。三兄弟の末っ子である康貴は、兄たちを尊敬はしていたが、世の常として、出来のいい兄たちの側では劣等感を覚えてしまい、何をしても上手くいかなくなっていた。その環境に我慢ができなくなり、逃げるように仕事場を東京本社から大阪支社へと移したのは、ほんの半年前のこと。大阪で過ごすうちに、初めて家族からの軋轢を感じずに、伸び伸びとした生活を送ることができるようになった。肩の力も抜け、不安もなくなった頃、康貴は一度実家へ戻ったのだが、その時に仕事一筋で女性との関わりを極力避けていた次兄の優貴が彼女を作ったという事実を知り、言葉を失った。

また、東京本社で経営の英才教育を受けながらも、高校の英語教師として二足の草鞋を履く長兄の一貴が、悪びれることもなく教え子の女子高校生と本気の交際をしていると知り、さらに驚愕したり、きょうご姫のように可愛がっていた、きりや桐谷莉世だったのだ。

信じたくもない事実を知った康貴は、きりやまたも兄弟たちから一人取り残されたような気がした。兄たちは、真剣に人生を歩んでいる。

なのに、末っ子の康貴は、まだ学生気分が抜けきっておらず、女性とは遊び半分で付き合うものだと思ってる。自分がどれほど愚か者なのか思い知らされ、大阪へ戻ってくることになった。

ただ仕事に打ち込むしかできない、ちゃんぼらん男。欲望を解き放つには、特別な女性はいらないと思っている男。

……有能な兄たちから逃げたいと思い、大阪出向の話に飛びついた弱虫な男。

康貴は、そんな情けない自分を振り払うように、ただ頭を振った。



「いらつしやいませ！」

康貴は大阪支社の近所にある、アットホームを売りにした、行きつけのカフェに立ち寄った。

「あつ、康貴さん！ まいど！」

関西弁を話す青年に、康貴は笑いかけた。

「よお！ 相変わらず働いてるんだな」

黒いギャルソンエプロンをした長身の青年は、さばさばしていて、いつも明るく接してくれる。その明るさが、いつも康貴をリラックスさせてくれていた。

「何言うてんの。康貴さんの方が、めっちゃ働いてるやん。いつものでええ？」

「ああ。それとホットサンドも」

青年の目が曇る。

「ちゃんとご飯食べてるん？ 彼女に作ってもらって栄養つけんと」

その言葉に、康貴はただ唇の端をあげて微笑んだ。

このお洒落なカフェを和やかで入りやすい雰囲気させているのは、彼だと断言している。もち

ろん、ここで入れるコーヒーは美味しいし、オーナー兼マスターの朗らかな性格も影響しているとわかってはいるが、この青年の人当たりのいい性格が、より一層居心地のいい空間を作り出している。これが東京なら……こうはいかないだろう。

やはり、大阪という場所が成せる技かもしれない。

青年の名は、如月篤史^{きつきよあつし}、二十一歳。就職活動真っ最中の大学四回生だ。

「お待ちせしました〜」

篤史が持ってきたトレーには、二人分が載せてあった。問いかけるように片眉を上げて、篤史を見上げる。

「いいでしょう？ 俺が一緒させてもらっても」

「まったく、篤史のヤツは……と思いつながら、康貴は心から笑みを浮かべ、向かいの席を指した。

「どうぞ」

これは、もう二人の間だけの会話となっていた。どちらかが話をした時や、何かがおかしいと気付いた時、こうやって同席するのだ。

オーナーは、康貴が安らぎを求めて常連となつてのを知っているようで、バイト中の篤史との会話を、多少は許してくれていた。

「康貴さんて、東京の人とは思われへんわ」

「何故？」

「う〜ん、近寄りがたくないから？」

それは、篤史がそういう雰囲気を持つていないからだ、康貴は心の中で呟いた。

「そういえば、今就活だったな。そっちも頑張つてるのか？」

「無理無理。今不況やから募集少ないし。それに俺特にやりたいことつてないねんわ。だけど、

どこかには必ず就職したい。姉ちゃんのためにも」

(姉のために……か。いいヤツだな篤史は)

「篤史……ダメもとで構わないから、一度ウチを受けてみたらどうだ？」

驚愕したように、篤史は後ろに身を退いた。

「無理やわ。だつて、俺が行つてる大学は一流どころか二流でもちゃうし。それに、時期がもう遅い」

「関係ないよ。要はやる気だろ？ それにお前は営業に向いてるような気がするな。相手をその気にさせるのが上手いから」

篤史は、ムツとしたように表情を変えた。

「それって、俺の口が上手いってことっすか？ 良い方にとつたらええのか、悪い方にとつたらええのか、わからんわ」

「良い方だよ。確か七月からは二次募集がある思う。帰国子女向けにな。公には一般学生の募集は終わつてるが、一般でも申し込んできたガッツのあるヤツは、人事課も考慮するだろう。言つておくが、俺はノータッチだから、自分を表に出して頑張るしかないぞ。まっ、ホームページでしっかり調べておくんだな」

康貴は和やかに受け答えて、ホットサンドを頬張った。

美味しい。バーで飲んだ酒より、よっぽど美味しい。

「……はあ、こんなに親身になってくれる康貴さんが、姉ちゃんの彼氏やったらな。俺、喜んで義弟になるんやけど」

その言葉が、妙に康貴の心を探った。以前篤史から聞いた、姉情報を思い出す。

「姉さんだって好きな男の一人や二人はいるさ。それに二十八歳だったよな？ 俺より三つも上なんだぞ？ 姉さんの方が嫌がるさ」

「姉ちゃん、つい最近二十九歳になったんやけど。ううん、そんなことより、それマジで言ってるわけ？」

鋭く睨みつけてくる篤史に、康貴は首をかしげそうになった。

何をそんなに怒ることがあるのだろうか？

「言っとくけど、姉ちゃんって年齢のわりに若く見えるし、美人やで。胸だって大きいし。弟の俺から見てもいい女ってわかる。そして、何より優しいねん。その姉ちゃんが、康貴さんを嫌がるなんてことは絶対ない！ ……もちろん、年齢は気にするかもしれないけど」

篤史は姉さん思いだなと思いつつも、「悪かった。でもな、付き合うとなるとお互いが決めることだから、な」と、思わず逃げ道を作ってしまう。

未だ、特定の相手を作るといふ感情が湧いてこないからだ。それに、年上の女となると……きつと康貴自身が躊躇ちゅうちゆしてしまうだろう。だが、そんなことを篤史に言えるわけがない。

「そうやな。姉ちゃんも、結婚の約束した彼氏がおるみたいやし」

そうだろう、そうだろう！ と頷くと、康貴は、安堵の笑みを思わず零していた。

篤史との楽しい会話を象徴するように、康貴は笑顔を向けて別れの挨拶をすると、カフェを出て、駅に向かって歩き出した。

だが、独りになった途端、心の奥底に閉じ込めていた“取り残されていく”という不安が、否応なしに康貴を包み込んでいく。

女性に対して……どうして本気になれないんだろう？

女嫌い、というのではなかった。むしろ大好きで、兄弟の中で、一番数多くの女性と付き合ってきたのは自分だと自覚もしている。だが、その中の誰一人として……本気で愛しいと思ったことなどなかった。

長兄が、あの莉世を特定の彼女にした理由は何だろうか？

康貴が覚えている莉世は、まだ小学生の女の子だった。だが、長兄の恋人として隣にいた彼女は、とても可愛く、綺麗な女性へと変貌していた。

妹同然の莉世と長兄の激しいキスシーンを目撃した時は、驚くと同時に、強烈なパンチを受けたように胸が痛んだ。まだ幼い妹だと思っていたのに、“女”を垣間見てしまったからかもしれない。

だが、莉世はもう“長兄の女”。康貴の心を出たり入ったりするガールフレンドとは違って、莉世はずっと心にいる女の子だったが、もう一人の女性として見てあげるべきだ。

そうは思っても、何故か大切にしていた妹にまで、見捨てられたような錯覚おちいに陥る。

同時に、不安に似た感情がまたも渦巻いてきた。

康貴は、胸に巢食う悪い気を追い出すように、長いため息をついた。

ほどなくして、長堀鶴見緑地線の最寄り駅に着くと、康貴は改札を抜け、プラットホームで電車が到着するのを待った。

電車を待つ間、お互いしか見えていないカップルが目飛び込む。

女性は彼氏を信頼しきっているように微笑み、彼氏は愛しくてたまらないというように、その女性を見下ろし、彼女の柔らかな頬を撫でていた。

以前なら、ニヤツと笑みを浮かべて、面白がって見ていただろう。

だが、今の康貴にとつてその光景はとても胸が痛いものだった。

遮断するように目を閉じた時、運良く電車が到着。そのまま電車に乗り込むが、先程のカップルが何故か優貴とその彼女に思えて仕方なかった。

双子の片割れとして、優貴のことをわかっているつもりだった。だが、それは間違いだった。優貴にも、人並みの欲望があるということに気が付かなかった。長兄の背を見て走る優貴しか知らなかったから。

その優貴が、会社の子と……特定の女性と付き合っているとは、やっぱり信じられない。

どうして、一人の女性と、本気で付き合えるのだろうか？ 心を曝け出せる相手がその彼女だと、どうして優貴はわかったのだろうか？

(愛が欠落しているこの俺でも……いつの日か、本気で一人の女性を愛することができるんだろう

か?)

兄たちと同じ「水嶋の血」は、康貴の中にも……きちんと流れているのだろうか？

電車は京橋駅を過ぎ、さらに郊外へと進んでいく。康貴は、一人住まいのマンションがある駅に到着するまで、ずっとそんなことを考えていた。

光り輝くネオンを見つめるその瞳には、将来の希望や夢などは一切映し出されていなかった……まもなく、運命とも言えるような苦しい恋をしようとは、この時の康貴はまだ知る由もない。



——六月

「それでは「水嶋」の方にいってきます」

亜弥は受付主任にそう告げると、バイトで働いている病院を出た。

輝く日差しを遮るように、目の上に手を翳す。すると、左手の薬指に詰められた精巧なダイヤの指輪に、日差しがキラリと反射した。

——「水嶋」か。

そもそも高原との出会いも、水嶋グループ大阪支社内だった。亜弥は、大阪支社の医務室に、週に三日の割合で、昼の三時から五時まで出勤していた。そこで、同じく病院から派遣されている、医務室勤務の渡辺都女史からカルテを受け取り、少しずつ整理していくのだった。

ある日、高原が医務室へ入ってきた。

亜弥が、病院の事務長からこの医務室へと任じられた、三日後のことだった。

「都、俺風邪ひいたみたい」

奥でカルテの整理をしている亜弥の耳に、男性の声が聞こえてきた。

「如月さん、こっちにきて」

そう呼ばれて、亜弥は奥の部屋から顔を覗かせた。

「どうかしました？」

亜弥が現れるなり、男性は驚いたようにビクツと軀を震わせ、脱ぎようとしていた背広を途中で止めて、こちらを振り返った。

「あつ、ごめんさない」

ビククリする亜弥を見た渡辺女史は、すぐに大声で笑った。

「いいの、いいの。わたしが呼んだんだし。高原秀明のカルテを持ってきてくれない？」

「はい」

亜弥は奥に引込み、頼まれたカルテを取り出すと、渡辺女史に手渡した。チラリと視線を高原

に移した時、見事彼と視線が合った。

これが、二人の出会いだった。

ビルへ入る前に“水嶋”の通行証を首にかけると、亜弥は警備員の前を通って医務室へ向かった。医務室のある階でエレベーターが開いた時、隣のエレベーターのドアが閉じる音がした。

また、渡辺女史のところに誰か来ていたらしい。用もないのに、皆居心地が良くて来るのだ。

でも、亜弥には社員たちがそう思ってしまう気持ちもよくわかっていた。

渡辺女史は、長いストレートの髪を一本のポニーテールに結び、いつもジーパンにブラウスというラフスタイルを決めていた。

化粧もナチュラルで、女性という雰囲気を感じさせない。中間と言ったらいいのだろうか？

初めて会ったあの日、高原が渡辺女史のことを“都”と呼んだ時はドキツとしたが、それは彼に限らなかつた。男性社員のほとんどが“都”と呼んでいたので、渡辺女史は皆から好かれているんだと、妙に納得したのだった。

「こんにちは」

挨拶しながらドアを開けると、渡辺女史が顔を強ばらせながらも、素早くこちらを振り返った。

「如月……です、けど？」

思わず、問いかけるように囁いた。

「あつ、ごめん。ちよつと……化粧室に行ってくる」

渡辺女史は、何故か亜弥を避けるようにして、慌てて医務室から出ていった。そんな風に取り乱した渡辺女史を見たのは初めてだったので、亜弥は息を呑むほど驚いた。

渡辺女史の髪は少し乱れ、白衣の下にいつも着ているブラウスには皺しわができていた。どうしたんだろう？

亜弥は不思議に思いながらも、バッグを奥のスペースに置くと、カルテ整理を始めたのだった。



「うわぁ、プロポーズされたん？」

今も交流が続いている大学時代の友人の碧みどりは、亜弥の薬指に光るダイヤモンドを見つけると、もつと近くで見ようと亜弥の手を取った。

「で、亜弥を見事落とした男は誰？」

薄暗い洒落たレストランで、亜弥は顔を曇らせた。

「落としたって……そんなんじゃないけど。不動産関連の営業マン」

「営業って、そんなにお金がないん？」

碧が、指輪を指して問う。

「そんなの知らない」

きつと、エンゲージリングにしては、あまりにも小粒なダイヤモンドだと思ったに違いない。碧のエンゲージリングは〇・七五カラットもあったから。

でも、このリングのブランド名を知ったら、驚くに決まってる。敢えて言わないけれど。

「えっ!? 年収がいくらだ……とか知らないでプロポーズ受けたわけ？ 亜弥、ダメやんか！ 相手が、もし借金こさえてたらどうするつもりなん？」

心配そうに言う碧に、亜弥は苦笑いを浮かべた。

そういうことは、全く気にしていなかったからだ。これがもし本当に好きな人なら、いろいろな気にしたり、将来に向けて希望を持ったりするんだろうけど……亜弥にはそんな気すらおきなかった。それよりも、指輪が気になって仕方がなかった。まるで、亜弥を縛りつけてるような気がして、何とも言えない複雑な気分になるのだ。

「……亜弥の気持ちわかるけどさ、妥協したらあかん」

「碧は、とつても幸せな結婚してるから、そう言えるのよ」

おちやらかに、碧の腕を小突くようにして言うが、亜弥の内心はとても複雑だった。

（お願いだから、あたしを惑わすようなことは言わないで！）

「わかった。亜弥が決めたことなんやから、もう口は出さない。けど、相談ぐらいやったら聞いてあげられるんやから、何でも話してよね？」

「ありがと。……ちょっとごめん。化粧室に行ってくるね」

席を立つことを謝ると、亜弥はこの話題から早く逃げたいとでもいうように、化粧室へと向かった。指輪を抜き取って手を洗うと、亜弥の口から思わず安堵のため息が漏れた。指輪を外したことで、気持ち少し楽になったのだ。高原から指輪をもらって以来、それを外す時には毎回憑き物が取れたように、リラックスできるのだ。

そう、指輪を外した瞬間に……

鏡に映った自分を見ると、その表情は幸せ絶頂という感じではなかった。空ろな目に、悲しそうに下がった口角。生き生きとした表情は、そこにはなかった。

本当にこれでいいの？

考えても仕方ないのに……と思いながら、亜弥は顔を閉じて、再びため息を吐き出した。

友人のいるテールへ戻ろうと、指輪を手にとった瞬間、亜弥の軀が強ばった。指輪を填めた時に感じる妙な不安が、また襲ってきたのだ。

碧と一緒にいる時は、楽しい時間を過ごしたい。ごめんなさい！

亜弥はその指輪をハンカチに包むと、バッグの中に入れた。そうしたこと、亜弥の顔に安堵の微笑みが浮かぶ。重石が取れたことで、亜弥は少しばかり輝きを取り戻し始めた。

化粧室のドアを開けた瞬間、いきなり股間に何か触れた。

「ひゃあ！」

なんて大胆な痴漢なの！

亜弥は睨みつけて怒鳴ろうとさえした。しかし、振り向いても誰もいない。

「えっ？」

だが、股間にはまだ触られている感触が残っている。視線をゆっくり下げてみると、小さな男の子が亜弥の太腿に腕を絡ませて抱きついていたのだ。シーンズだから、ちょうどアノ場所に触れる。

「えっと、ボク？」

痴漢と間違えた恥ずかしさから、亜弥の頬はほんのり染まった。間違ったことを気にしないようにしながら、必死に抱きついている男の子に優しく囁きかけた。

すると、その子は驚いたようにビクツとし、すぐに腕を離れた。亜弥を見上げるその表情は、とても不安そうに曇ってる。

そっか、お母さんと間違えてしまったのね。

亜弥は屈み込むと、その男の子と同じ視線になって見つめた。

「お母さんを探してるの？」

「……うん」

口の端がへの字に曲がり、今にも泣きそうな気配だ。

「じゃあ、お姉ちゃんも一緒にお母さんを探してあげる」

「ほんと？」

「うん」

にっこり微笑むと、男の子が無造作に亜弥の首に抱きついてきた。子供独特の甘い匂いが鼻腔を擦る。

きつと淋しかったのだろう。

子供ってなんて可愛いんだろう……、亜弥はそう思いながら、子供の背中をギュッと抱き締めた。(あたしも、いつの日か子供を持つのかな？ 高原さんとの子供を)

そう考えたのは亜弥自身だというのに、思わず塞ぎ込んでしまいそうになった。

だが、今は塞ぎ込んでいる時ではない。目の前で、不安そうにしている、男の子のお母さんを探してあげなければ。

「ボクのお名前は？」

男の子の肩に両手を置くと、視線を合わせながらゆっくり問いかけた。

「……こうた、みつつ」

「そう、こうたくんね。お姉ちゃんね、」

と言いかけた時、何やら強い視線を感じた亜弥は、おもむろに視線を上げた。

思わず、驚きから口が微かに開く。

そこには、目の覚めるような威圧感のある……男性が立っていたのだ。しかも、彼も驚いたように目を見開き、亜弥を見つめている。

時が、一瞬で止まったような感じを受けた。

全てが、スローモーションのようにゆっくりと進んでいく。腕に触れてる男の子の存在さえ、頭にはなかった。

ぴったりとしたTシャツは彼の胸板に張りつき、贅肉などついていないことがはっきり見て取れる。亜弥好みのすっきりとした髪型をしているのもあって、一目で彼に好印象を抱いた。

彼の視線がおもむろに下に向けられ、甘いものをもらって喜ぶ子供のように、口角が上がっているのが亜弥からも見て取れた。

なんて素敵な笑顔なの。初対面の男性に対して、こんなにも心が高鳴るなんて……

亜弥は、自然とそう感じていた。

「康汰、ここにいたのか？」

目の前の男性がそう言うと、腕の中にいた男の子が飛び跳ねるようにパッと振り向き、亜弥の腕から……その男性の方へ駆けていった。

「何してたんだ、ママが心配してるぞ？」

彼はそう言いながら、男の子を楽々と抱き上げた。

「ママ、さがしてた」

「そっか」

彼はそう言いながら、視線を亜弥に向けた。

亜弥は、まだ呆然と彼を見つめていた。視線が再び重なった瞬間、心臓が飛び跳ねるほど激しく高鳴り、息が思うようにできなくなる。彼が、ゆっくり近寄ってきた。彼に見下ろされるだけで、何だか守ってもらってるような気さえる。

バカ、彼は父親なのよ。パートナーのいる男性にときめいてどうするの？

それに、亜弥だって、高原という婚約者がいる。

「悪かったね。この子が君に迷惑をかけたのでなければいいんだが」

彼は優しく微笑みながら、さらに近付いてくる。

「いえっ、そんな迷惑だなんて」

と言いながら立ち上がるが、視線は何故か彼の左手の薬指を見ていた。そこに愛の証はなかった。視線を上げると、彼は探るように亜弥を見つめていた。

「君は……一人？」

「いえ」

どうしてそんなことを訊くのだろう？ それに、どうしてそんなに亜弥を見つめるのだろうか？

不思議に思いながらも、亜弥も彼から視線を逸らすことができなかった。

その時、ハイヒールが床を打つ、コツコツという音が耳に入った。

「康貴？ どうかしたの？」

軽やかな女性の声が、亜弥の耳にも届いた。

その女性が登場したせいか、彼は苛立ったように一瞬天井を煽ぐと、大きく息を吐き出してから、ゆっくり振り返った。

「朱音……」

亜弥は、ズキッと胸が痛くなった。

彼は亜弥のモノでも何でもない。ただの通りすがりの人。だけど、彼の字を息子に名付けて、美しい妻と共に幸せな生活を送っているのだとわかると、胸を叩かれたような痛みが走った。

こんな幸せそうな家族を、見たくはなかった。亜弥には、全く望めそうもない光景だったから。

「康汰、見つかったのね。良かったわ」

朱音と呼ばれた女性が、安心したようにホッと吐息をつく。

逃げ出したい。ここから早く……彼の前から逃げ出したい。

「それじゃ」

亜弥はか細い声で囁くと、康貴という彼の側を通り抜けて、逃げるように友人の元へ行こうとした。

「待って！ 君」

彼が、大きな声で亜弥を呼び止めた。

亜弥は、ビクツと軀を震わせながら立ち止まると、ゆっくり振り返った。彼が何か言いたそうに、こちらを見る。

「康貴？」

朱音と呼ばれた美しい女性が、引き締まった彼の腕にそっと手を乗せた。

美男美女の夫婦に可愛い息子の絵図。亜弥の中に、絶望感が生まれた。

「……さようなら」

亜弥は、その光景を振り切るように、碧の元へ向かった。

「亜弥？ どうかした？」

席に戻ると、今にも泣きそうな亜弥の表情に、碧が心配そうに問いかける。

「ううん……何でも、ない」

目の奥がチクチクしてくるのを感じると、亜弥は臉まへを伏せて座った。

(何で……あたしはこんなにも絶望を感じてるの?)

どうして、通りすがりと行ってもいい彼のことを思うと、こんなにも胸が痛むの？

彼らの幸せそうな夫婦姿が、羨うらやまましかったから？ それとも、その隣にいた女性に嫉妬を感じたからだろうか？

激しく心が揺さぶられるのを感じながらも、亜弥は何故か祈らずにはいられなかった。

もう二度と……康貴と呼ばれていた彼とは、会いませんようにと。



その場に取り残された康貴は、苛立ちを覚えていた。

康貴を避けるように去っていく……彼女の後ろ姿を、ただ見送ることしかできなかったからだ。

目をつけた女性に逃げられたことは一度もなかっただけに、今回彼女ときっかけすら作れなかったことが、康貴には信じられなかった。

「康貴」

再びそう呼ばれると、康貴は振り返って、久しぶりに東京から大阪へ来て、つまらない相談をしてきた、元恋人の朱音を睨みつけた。

いつも、自分のことしか考えない女。自分中心でないと気がすまない女。

数十分前に、食事をしながら朱音と無意味なやり取りをしたことを康貴は思い出していた。

「それで……いきなり大阪に来た理由は？」

口をナプキンで拭うなり、鋭い眼光を放ちながら言ったのは、康貴だった。

康貴は、目の前に座る大学時代の友人であり、セフレでもあった朱音を探るように見つめた。

「理由がなければ、来てはいけなかった？」

誘うように上目遣いで康貴を見て、唇を尖らせるその仕草……、本能を揺さぶるような女の妖艶さに、酔いしれたのはもう昔のこと。

康貴は脱力すると、そのまま座り心地の良い椅子の背に凭れた。

「いけない、とは言っていない。だが、俺を呼び出したりする必要があったのか？」

化粧を濃く施したその顔は、人妻には見えない。正しくは、朱音は人妻ではないが。

視線を横に向け、小さな男の子を見る。康貴の名を一字受け継いだ……康汰を。

「相談にのって欲しかったの。もちろん、その相談料は……夜のお楽しみで一生懸命お返しするわ」
白くて細い指が康貴の腕に触れ、*“夜のお楽しみ”*を暗示するように、爪で軽く愛撫する。

「朱音……」

呆れたように、康貴は言葉を吐き出した。

「何？ 今さら照れるようなことでもないでしょ？ わたしをこんな女にしたのは、康貴、貴方なのよ」

「それを進んで受け入れたのは、朱音、お前の方だろ」

康貴は、その愛撫から逃れるように、そっと彼女の手を振り払った。朱音は康貴のその反応に動じることもなく、ただ肩を竦めた。

「だって、康貴のモノになりたかったんだもの。だけど、康貴にとったら、女なんて皆同じなのよね」

唇を尖らせると、朱音はワインを一口含んだ。

「俺たちは、割り切った関係だった。それは朱音も納得していただろ？」

「そうだけど……」

康貴は腕を組むと、康汰を眺めた。

（もし……康汰が本当に俺の息子だったら、朱音を妻にしてただろうか？）

決して一緒にはなりたくない女だったとしても。

康貴は、朱音を観察するように視線を移す。彼女は息子の康汰を見ていた。だが、しばらくしてから、康貴へと視線を向けた。

「本当に康汰は……康貴の子供ではないって言いきれぬ？」

「当たり前だ。俺は避妊には特に気を使ってる。望まれない子供を植えつけないからな。それに……計算があわない」

朱音は、大きくため息をついた。

「もう、本当に男って！ どうしてそんな細かいことまで覚えてるのよ」

「それが普通だろ？」

朱音は康貴を睨みつける。

「わたしだって、どんなに康汰が康貴の息子であればいいと思っただか。康貴がわたしの最後通牒を受け取って、わたしとの接点を全て捨て去ったから……わたし淋しくて」

「今さらそんな話はしなくていい。俺は、朱音を縛っていたことはないし、あの時は既に俺たちの関係は終わっていた」

「康貴流の、セフレ……がね」

朱音は吐き捨てるように言った。そんな朱音を、康貴は冷静に観察していた。

「昔話でしたかったのか？ それとも、昔馴染むかしなじみで俺に抱かれたかったから、わざわざ東京から大阪へ来たのか？」

朱音は唇を噛み締めて、康貴を睨みつける。

「違うわ！ もちろん、一夜のアバンチュールは拒まないけれど。だって、わたしをあれほど燃えさせてくれる男は、今でも康貴しかいないもの」

「朱音」

康貴は、ダラダラと話す朱音に苛立っていた。それをすぐに察した朱音は、とうとう本題を話し出した。

「わかっているわよ。実は……康汰の実の父親が、わたしを欲しうって言ってきたの」

康貴は、驚いたように片眉を上げた。

「良かったじゃないか。康汰を妊娠中に喧嘩別れして以来だろ？」

朱音は、急にそわそわしだした。

「違うの。康汰を産んだ後も……接触はしてた」

「ああ、セフレか」

康貴は、うんざりしたようにブランドーを一口呑む。

「そう言われても仕方ない。でも、彼は決して康汰を自分の息子と認めないのよ。だって、わたしは……」

「俺の字を与えたから？」

最後の言葉を引き継ぐように康貴が告げると、朱音は肩を竦めて肯定した。

「言えがいい。俺の字を与えたのは、康汰を産む時……助けを求めてきた朱音を、病院へ連れていったのが俺だったからだ」と

「言ったわよ。でも、信用してくれないの。……だって、わたしは康貴に抱かれてたんだもの」

「俺にどうしろっていうんだ？」

「康貴が彼に一言、」

「ダメだ」

康貴は、すぐに断った。

本当にわかっているのだろうか？ そいつは、自分の息子に一字を与えた男を意識しているというのに、当の本人が現れたらどうなると思うんだ？

朱音の考えのなさに、康貴は頭を振った。

その時、子供が椅子から消えてるのが目に入った。

「朱音、康汰がいないぞ？」

「えっ！」

朱音はビクツと軀を震わせ、視線を彷徨^{さまよ}わせる。

「康汰！」

その慌てぶりは、母親としか言いようがない。

見た目はモデル風の美女でも、やっぱり母親なんだと、康貴は改めて気付かされた。朱音はこの場所にいた方がいいと判断し、手で制すと、康貴は自分だけ立ち上がった。

「お前はここにおいて、康汰が戻ってくるのを待ってる。俺が店内を探してくる」

小さな坊主を求めて周囲を見渡しながら、康貴は薄暗い店内を歩き出した。ウェイターに、それとなく店内に注意を向けてくれるよう頼むことも忘れなかった。

あの坊主は、母親に一言も言わず、いったいどこへ行ったんだ？

イライラしながら店内を歩いていたが、もしかしたら化粧室へ行ったのかもしれないと気付いた。康貴は、そのままレンガの塀で仕切られた化粧室へと、ゆっくり向かった。

そこで、康汰を抱く見知らぬ女性を見て、衝撃を受けた。

優しくそんな彼女の甘い声が、康貴の心を駆け抜けると同時に、軀の芯が熱くなった。意図せずして、心を揺さぶってくるその女性を見ているだけで、胸が高鳴った。

思いがけない欲望に戸惑いながらも、康貴は彼女が独占欲の証、薬指に光る指輪^{指輪}をしているの
か確かめ、そこに証がないことを知ると、いつの間にか満足気に微笑んでいた。

いいことが起きそうだ……

そう思った矢先、朱音が邪魔をしたのだ。

グツと奥歯を噛み締めながら、康貴は朱音を射貫^{いぬ}くように睨んだ。

「まさか、邪魔するとはな」

「……康貴、わかっているの？ 今まで見たことがないような、だらしない表情をして！ まるで、
飢えたオスみたいだったわよ。あんなのは康貴じゃないわ」

その言葉に、康貴は怒りがどこかに吹き飛んだ。

(俺が、飢えたオス……だと?)

確かに、女に飢えてはいる。だが、だらしない表情をした覚えはなかった。

康貴は、自然と眉をひそめていた。

「ほらっ、もう出ましよう。康汰が康貴の腕の中で寝てしまいそうだし」

見てみると、確かに康汰がうつらうつらと船を漕ぎ、寝てしまいそうになっていた。

康貴は仕方なく、そのまま会計で精算をする。

店を出る時、康貴は振り返って彼女を探さずにはいられなかった。

もう一度、彼女と出会えるだろうか？ もし、再会できたら……今度こそ接点を持ち、必ず彼女
を手に入れる！

そんな康貴を見て、朱音は康貴の腰に触れた。

「康貴。女が欲しいなら……わたしが今夜慰めてあげるから」
康貴は朱音を睨みつけると、タクシーを拾うために大通りへ向かって歩き出した。
再び彼女と出会えることを願いながら……



——八月

いつしか、世間という夏休みが終わろうとしていた。

将来を誓い合った二人なら、残暑をも吹き飛ばすようなラブラブっぷりで、きっとデートも楽しいに違いない。

だが、亜弥の微笑みは曇っていた。

人目を引く高原の隣に並べるだけで、亜弥は幸せだと思わなければいけない。薬指には、愛の証も輝いているのだから。

しかし、亜弥と高原の間には……恋人同士なら有り得ないギクシャクとしたものが、確かに存在していた。

（どうして、あたしを求めようとしないの？ どうして、あたしをホテルに連れて行って抱きしめようとはしないの？）

苦悩を秘めながら、亜弥は遠慮深く高原の腕に手を絡ませていた。

出会ってから三ヶ月後にはプロポーズされ……それから四ヶ月も経とうとしているのに、どうして二人はキスと愛撫までなんだろう？

このことが、亜弥を苦しめている。

もし、求めてくれたら……^{からだ}軀ぐらい彼のモノになれば、少しでも楽になれるというのに。高原の欲望が薄いのだろうか？

亜弥は、心の中で頭を振った。

違う……亜弥に触れる時、高原は確かに欲望を秘めている。

秘めているのに、彼はその荒々しい欲望を無理やり押さえ込んで、途中で止めてしまう。

どうして？ どうしてなの？

本当は、訊きたい。訊きたいが、上手く訊けない自分がある。もし、高原を心から愛していたのなら、問い詰めることもできるのに。

もしかして……彼を問い詰めないのは、逃げ場を作ってるからだろうか？ 彼が、プロポーズを撤回するのを、両手を広げて待っているからだろうか？

亜弥は、隣にいる高原をそっと見上げた。

「うん？ どうした、亜弥？」